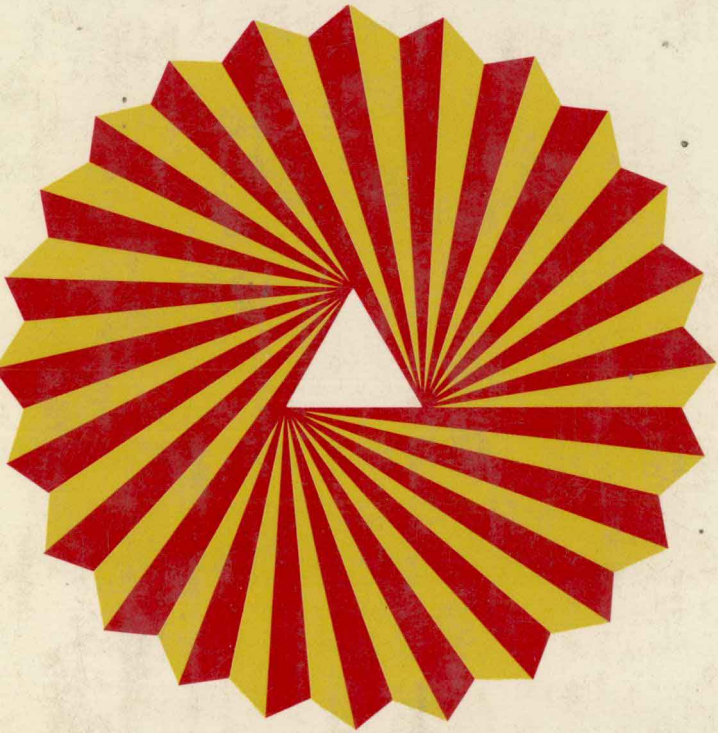
武藤元昭

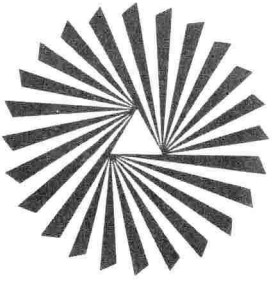
古文の重点研究



三省堂

武藤元昭

古文の重点研究



三省堂

〈本書の特長〉

この本は、お使いになるあなたが、少しでも古文のおもしろさがわかり、しかも着実に力がつけられるように、古文の苦手なあなたの気持ちになって書かれています。

- ●あらゆるジャンルにわたって、豊富な題材をすべて最新の大学入試問題から選んでいます。（九〇題収録）
- ●問題とその解法を中心に据え、その中で作品の解釈と鑑賞もできるだけ丁寧にして、古典のおもしろさをわかるようにしています。
- ●語句もできるだけ多く取り上げて解説し、必須古語を修得できるようにしています。（索引で確認しよう）
- ●受験のための古文の読解・鑑賞に必要な知識（基本古語・文法・文学史）を最大限取り上げています。
- ●〈確認事項〉〈これだけは覚えよう〉を活用できます。

本書を初めから終わりまで読み通せれば、確実に実力が着きます。限られた時間を有効に用い、何とかやり遂げよう。

古文の重点研究

定価1,200円

1981年9月25日　第1刷発行

©

著　者　武藤元昭

発行者　株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所　株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電話　編集　(03) 230-9411
　　販売　(03) 230-9412
　　総務　(03) 230-9511

振替口座　東京 6-54300

〈古文重点研究・536 p. p.〉N.D.C. 分類番号 910

落丁本・乱丁本はお取替えいたします　Printed in Japan

序に代えて

受験用の参考書など書いたこともなかった私に、話が持ち込まれたのは、もう数年前になる。若干、受験生のお相手をする機会に恵まれていたので、いささかの好奇心も手伝って、気軽にお引受けしたのだが、想像していたのとは大幅に勝手が違い、苦戦を強いられることになった。一つには、従来のものとは少しでも毛色の違ったものを書きたいと願ったからであり、一つには、そういう自分の願望が受験という作業とうまく嚙み合うか不安になったからである。

かねてから、古文というものが単に受験勉強の対象としてしか見られない傾向に不満を持っていた私は、たとえ受験用の参考書であっても、そこに少しでも古典のおもしろさがわかるものを盛り込みたいと考えた。それには、作品の解釈と鑑賞をできるだけ丁寧にしてみたいと思った。暗記しなければどうしようもないことは、いくら紙上で説いてみても始まらない。それは受験生本人の努力に関わることであるから。そこで、実際の入試問題を採り上げつつ、解釈・鑑賞中心に説いてみようと試みたのである。いわば、手作りの良さを生かしてみようと思ったのである。だが、その試みが、受験という現実と果たしてうまく融合するものなのか否か。こうして、自分なりの考えに基づいて一冊の本を書き上げた今、不安が襲うのを否定できない。

しかし、考えてみると、言葉を扱う勉強に、そう能率的な方法などあるはずがない。数多くの文章を読み、言葉に慣れるしかないのである。となれば、この本によって、多くの文章に接し、解釈の仕方を

勉強することは、古文の学習の方法としては、やはり正しいはずだ、とも私は考えるのである。

正直な話、古文を含めて、国語を完璧に仕上げるためには、単なる受験勉強だけでは追いつかない、と私は思っている。国語の実力は、一朝一夕で身につくものではない。極端に言えば、生まれ落ちて以来の言語生活のすべてが、個々の国語の実力を形成してきているのである。若い人の国語力の低下を嘆く声が出て久しい。確かに、以前と比べて、若い人の国語の力は落ちていると、私も思う。少なくとも、語彙は大幅に減っているのではあるまいか。その原因は、やはり一般に言われるように、読書量の低下であろう。活字離れによって、言葉に接する機会が少なくなった。見ることと聴くことに伝達の方法が偏り、文字の力が魅力を失ってきているのである。自分の頭で考え、自分の言葉で表現することに慣れている人は、国語の力もすぐれているはずである。古文も例外ではない。古文は決して単なる暗記科目ではないと思う。もちろん、暗記に頼る部分が多いのも確かである。だが、その暗記にしても、文章の中で身につけていくことが肝心であろうし、能率的でもあろう。まして、解釈となれば、自分の言葉を持たない人は苦しくなる。そこで、本書では、下手に近道を考えず、じっくり文章を読んで、実力を蓄えるよう持っていくことを意図したわけである。

どういうわけか、古文が好きだと言う人は少ない。むしろ、積極的に嫌いだと顔をしかめる人の方が多い。が、私に言わせれば、それは一種の食わず嫌いなのだろうと思う。試みに、試験勉強ということを離れて古典の文章を読んでみるとよい。きっと、何かを感じるはずである。本当は、活字でなく、もとの本（写本）を、まず目にしてみるとよいのである。変体仮名と呼ばれる文字で、水茎の跡麗しく記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

された作品を見れば、それが難しくて読めないとしても、我々の祖先への親しみは感じることができるのではあるまいか。

自分の話で恐縮だが、私が大学の国文科へ進んだのは、確かに国語が好きだったからである。だが、国語好きの一少年（?）が、本格的に日本の古典と取り組んでみようと思ったのは、写本に接してからである。印刷術など一般的でなかった平安の昔、自分が気に入った作品を手許に置いておきたいと思えば、自分の手で写すより他に方法がなかった。その作品に愛着を感じた人は、愛情こめて自らの手で写したのである。それが、現在我々の目に触れる『枕草子』や『源氏物語』なのである。それらの写本を実際に見た時の感激はすばらしいものであった。また、変体仮名が何とか読めるようになって、いろいろな古典を変体仮名で読めるようになった喜びも忘れ難い。もっとも、その後私の専攻は近世文学になった。近世文学の作品の多くは、板木に彫った板本というもので、つまりは、現代の版画のような作業によって印刷された本である。これはこれでおもしろい。ことに、出版事業が軌道に乗った近世には、貸本屋というものが活躍した。この貸本屋の手を経て貸し出された本を手にすると、黒く手垢に汚れた本から、当時の読者の息吹きが感じられるように思うのであって、平安時代の文学の写本とはまた異なった興味をそそられるのである。

このように、古典には様々な思いが籠められていて、単に受験勉強の対象として割り切るには甚だ惜しい気がするのである。もちろん勉強に忙しい諸君にとって、こんな話は全く興味のないものかも知れない。しかし、古典がこのような背景を持ったものであると知ってくれれば、少なくとも、古典に向ける目は変わってくるのではあるまいか。

試験勉強に余計な思い入れはしない方がいいかも知れない。しかし、実のところ、古文に関して言えば、こうした思い入れがあった方が勉強がしやすいと思われる。宮中に仕えた女房達が書いた作品を、その成立の様子も想像せず、ただ助動詞の用法・意味や、単語の意味などを調べ、暗記するだけで片付けてしまうのでは、あまりに味気ない。想像をふくらませて読んでこそ、初めて文章が味わえるのではなかろうか。また、そうすることによって、暗記もしやすくなるのではないか。こういう考えは、私が本書を書いていく時、常に頭から離れなかったことである。確かに、入試科目が数ある中で、古文だけにそう多くの時間を割くわけにはいくまい。しかし、だからこそ、実のある勉強が望まれるのだろう。

苦手なものほど、対象の本質を見極め、対策を確と定めなければならない。勉強は魔術ではない。地道に歩むしかない。苦手な科目なら、余計それが必要である。また私事になって恐縮だが、私は数学が苦手で、非常に困った。初めは背伸びして難しい問題を解こうとし、結局失敗した。そこで、教科書を初めから見直すことにした。それが良かった。古文も同様だと思う。本書を初めから終わりまで読み通せれば、確実に実力が上がる。もちろん、本書はどこから読み始めても利用できるようにはしてある。しかし、段階を踏んできちんと読むことが大切なのである。限られた時間を有効に用い、何とかやり遂げてもらいたい。諸君の勉強が実を結ぶよう、心から祈っている。

一九八一年八月

著者記す

目　次

序に代えて (1)
はじめに〔古文とは何か〕……1

第一編　入　門……5

第一章　古文に慣れる……5
第二章　文意を大きく把える……7
第一節　全体から部分へ……7
例題一　今は昔、竹取の翁……(竹取物語)…7
第二節　段落による文意の把握……10
例題二　我、その能ありと……(十訓抄)…10
第三節　主題考察による文意の把握……14
例題三　仁和寺にある法師……(徒然草)…14
第四節　主情的な文意の把握……17
例題四　山に正管僧都といふ人……(発心集)…17

第二編　基　礎……22

第一章　古文にはどんな種類があるか……22
第一節　物　語……22
第一項　王朝物語……22
〈歌物語〉……22
問題一　昔、男、片田舎に……(伊勢物語)…24
〈長編物語〉……29
問題二　月のいとはなやかに(源氏物語・須磨)…31
問題三　三四日吹きて……(竹取物語)…35
〈短編物語〉……40
問題四　虫めづる姫君……(堤中納言物語)…40
第二項　歴史物語……47

問題五　また、ついでなきことに……(大鏡)…49
第三項　軍記物語……54
問題六　さる程に、六代御前は……(平家物語)…56
第四項　近世小説……62
問題七　この男、生まれつきて…(日本永代蔵)…63
第二節　説話文学……67
問題八　夜もすがら……(今昔物語集)…69
問題九　東北院の菩提講……(宇治拾遺物語)…74
第三節　日記文学……79
問題十　御前の池に……(紫式部日記)…82
問題十一　里びたる心地には……(更級日記)…86
第四節　随筆文学……92
〈枕草子〉……92
〈方丈記〉……94
〈徒然草〉……95
問題十二　鶯は、文などにも……(枕草子)…96
問題十三　一道に携はる人……(徒然草)…101
第五節　評論文学……105
〈物語評論〉……105
〈歌論〉……106
〈連歌論〉……107
〈能楽論〉……108
〈俳論〉……109
問題十四　さまざまの心のほど……(無名草子)…110
問題十五　静縁法師、みづから……(無名抄)…115
問題十六　このころ、人の……(ささめごと)…120
問題十七　この道の第一の……(風姿花伝)…124
問題十八　岩鼻や……(去来抄)…128
第六節　俳文その他……132
第一項　短詩型文学……132
〈和歌〉……132
〈漢詩〉……133
〈歌謡〉……134
〈連歌・俳諧〉……135
〈俳文・紀行〉……135
第二項　戯曲……136
〈能・狂言〉……136
〈浄瑠璃〉……137
〈歌舞伎〉……137
第三項　その他……138
問題十九　……(百人一首)…138
問題二十　嵯峨に一つの……(落柿舎ノ記)…143
問題二一　孫右衛門は老足の……(冥途の飛脚)…147

第二章　古文では何を聞かれるのか……152
第一節　語　彙……152
第一項　古文特有の語……153
問題二二　ふと心おとり……(枕草子)……158
問題二三　大納言行成卿……(十訓抄)……162
第二節　文　法……167
第一項　品　詞……167
〈動　詞〉……167
問題二四　昔大安寺に……(発心集)……177
問題二五　かぐや姫を……(源氏物語・手習)……184
〈形容詞・形容動詞〉……188
問題二六　をばなる人の……(堤中納言物語)……191
〈副詞・連体詞・接続詞・感動詞〉……196
問題二七　今の左の大臣……(大和物語)……201
〈助動詞・助詞〉……207
問題二八　つごもりに……(讃岐典侍日記)……216
問題二九　和泉式部歌数など……(無名草子)……221
問題三十　あだし野の露……(徒然草)……227
第二項　識　別……231
問題三一　かくて、この間に……(土佐日記)……237
第三項　敬　語……242
問題三二　わらは病に……(源氏物語・若紫)……248
問題三三　御心ばへぞ……(大鏡)……253
第四項　語法—係結びを中心として—……258
問題三四　俊恵に和歌の……(無名抄)……262
第三節　文章解釈……266
第一項　技巧・修辞……266
問題三五　沓冠折句の歌……(俊頼髄脳)……267
問題三六　逢坂山……(平家物語)……271
わらぢに……(竹斎)……271
第二項　情況と文脈の整理……277
問題三七　大納言殿……(枕草子)……278
問題三八　夢よりも……(和泉式部日記)……284
問題三九　俊恵いはく……(無名抄)……289
第三項　心情描写の読解……295
問題四十　その返る年の……(更級日記)……296
問題四一　これも今は昔……(宇治拾遺物語)……301
第四項　解釈と鑑賞……307
問題四二　かくはあれど……(蜻蛉日記)……307
問題四三　出でさせたまひ……(大鏡)……321
第四節　文　学　史……326
問題四四　作品に関して……328
問題四五　作品・人物に関して……332

第三編　総　合 …… 335

第一章　語　彙 …… 335

問題四六　節分違へなどして……（枕草子）…336
問題四七　心なしと見ゆる者……（徒然草）…338
問題四八　今は昔、式部大輔……（古本説話集）…343
問題四九　中ごろ、市正時光……（発心集）…347

第二章　文　法 …… 350

問題五一　或る時、猫間中納言……（平家物語）…355
問題五十　昔、男、みちの国……（伊勢物語）…350

第三章　解釈・鑑賞 …… 361

問題十　今は昔、唐に……（宇治拾遺物語）…398
問題十一　大納言なりける人……（今物語）…402
問題十二　中比なまめきたる……（古今著聞集）…406
問題十三　或る山寺の坊主……（沙石集）…410

第四編　応　用 …… 361

第一章　物語・小説 …… 361

問題一　かやうに、御心を……（竹取物語）…361
問題二　むかし、左兵衛の督……（伊勢物語）…365
問題三　すべて男も女も……（源氏物語・帚木）…368
問題四　やうやう風なほり……（源氏物語・明石）…373
問題五　入道殿御嶽に……（大鏡）…378
問題六　斎藤滝口時頼……（平家物語）…383
問題七　折ふしは正月七日……（日本永代蔵）…386

第二章　説　話 …… 390

問題八　今は昔、一条の……（今昔物語集）…390
問題九　今ハ昔、傅大納言……（今昔物語集）…395

第三章　日　記 …… 414

問題十四　七日。けふ……（土佐日記）…414
問題十五　時はいとあはれなる……（蜻蛉日記）…417
問題十六　春秋のことなど……（更級日記）…421
問題十七　十月十余日のほど……（讃岐典侍日記）…424
問題十八　今年、三位入道は……（源家長日記）…427
問題十九　和徳門院の……（十六夜日記）…433

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　随　筆……436
問題二十　里にまかでたるに……(枕草子)…436
問題二一　無名といふ琵琶……(枕草子)…442
問題二二　おほかたこの所に……(方丈記)…445
問題二三　人の物を問ひたるに……(徒然草)…450
問題二四　おのれ古典をとくに……(玉勝間)…452
第五章　評　論……455
問題二五　この世に、いかで……(無名草子)…455
問題二六　俊成の家は……(正徹物語)…458
問題二七　一、秘する花を……(風姿花伝)…462
問題二八　あはれあはれ……(歌意考)…466
問題二九　ある人の問ひけるは……(源氏物語玉の小櫛)…471
第六章　和歌付俳諧・川柳……474
問題三十　和歌・文章・詞句……474
問題三一　和歌・川柳……478
問題三二　和歌・文章……481
問題三三　歌　合……(六百番歌合)…488
問題三四　家の集など……(建礼門院右京大夫集)…491
問題三五　今日は親しらず……(奥の細道)…494
解答編……501
索　引……511

はじめに

古文とは何か

一

国立大学に共通一次試験が採用されるなど、入試制度に変革が起きている。しかし、国語だけは、どんなに入試が変わろうと、受験生諸君が避けて通ることはできない。国語とは日本語であり、日本の学問のほとんどすべてが日本語を基本としている以上、日本語ができなくては話にならないのである。

古文は、その国語の中の一科目である。したがって、原則としては、これも必須であるはずなのだが、現実には、古文を入試科目からはずす大学、学部も多い。それは、古文を外国語扱いするからである。例えば、理科系では現代語だけ知っていれば用が足りると考えるわけである。

では、古文とは何であろうか。入試科目では、古文は日本の古典を指している。古典はどの国にも存在する。そして、どの国も自国の古典をたいせつにしている。古い国ほど古典への愛着を強く持っている。それは、古典がその国の歴史と深く結びついているからであり、国民思想の源泉となっているからである。古典に接することで、我々は先達の思想に触れることができる。千年もの長い年月、多くの人々に読まれ、さまざまな価値観を与えられてきたものが古典なのである。古典を読むということは、ある意味では、自分の思想を顧みることである。自分が育った土壌を培ってきた、この国の姿を、我々は古典を読むことで知り得る。長い年月を経てきた古典は、それなりの重みを持っている。それだけに、これをできる限り正確に読むというのが、いわば、後世の我々の義務である。むろん、古典は、古典の時代に遡(さかのぼ)ってのみ理解されるものではない。現代には現代の読み方、現代の理解の仕方がある。しかし、どんな読み方をするにしても、まず原典を正しく読むことが不可欠である。いいかげんな知識で恣意的に読むので

は、古典の生命が損われる。

古典は、決して特殊なものではない。血の通った、現代においても新鮮な息吹きを感じさせるものである。したがって、読む側も新鮮な気持で読まなければならない。それによって、古典の持つ独自のおもしろさ、そして現代に通じる普遍的なおもしろさを感じることができるのである。古典を自由に楽しく読んで、初めて古典は我々の身近なものとなり得るのである。内容は何であれ、古典には我々の知らない世界があり、また永遠に変わらぬ真理がある。それらを大きく想像をふくらませて楽しく読むことができたら、我々の物の見方に幅ができるだろう。古典とは、本来そういうものであるべきなのだ。

『源氏物語』を通して読んでみよう。『枕草子』の全文を読んでみよう。教科書の数ページで、わずかな一面しかのぞき得なかった諸君は、さまざまな新しい発見をして、目が覚める思いがするだろう。歌を、作者の気持になって読んでみよう。新たな感動が諸君を襲うであろう。風雪に堪えて生き残った古典には、それだけの魅力が秘められているはずなのである。

ところが、入試における古文となると、その意味での古典として受け取られないことが多いようである。少なくとも、入試に取り組む受験生諸君には、単なる入試科目であり、受験勉強の対象でしかないように見える。一方、出題者の側はどうか。出題者は、ほとんどが国文学の専攻者である。古文を、本来的な意味での古典として扱う立場に立っている。そこに、出題者と受験者との意識の差が生じ、受験生の苦労が出てくるのである。むろん出題者も高校の教育課程は一通り知っているし、無理な解答を求めるつもりもない。しかし、受験生のほうがただやみくもに勉強するだけでは、出題者の意図を汲み取ることができないのも事実である。そこで、そうしたギャップを埋めるために、あらためて、入試における古文とは何か、受験生には何が求められるのかを考えてみよう。

二

古文が古典であることは確かであるが、入試の古文ということになると、さて、受験生には何が要求されるのだろうか。それがわからなければ、入試への対策の立てようもない。同じ国語であっても、古文の要求は現代文とどのよ

うに異なるのであろうか。最近の古文問題には、全文の趣旨、筆者の意図、主題などを問う設問が増してきている。現在のような入試制度になる前の大学入試では、古文の設問は、ほとんど全文訳であった。その点では、解釈だけでは答えにならない現在のほうが受験生にはつらいところもあるわけであるが、そうした設問は、いわば現代文に似通ったものである。国語の基本的要求が文章の理解であるということから考えれば、これも当然の設問なのであるが、古文の場合、その要求に応えるには、現代文以上に知識が必要となる。知識とは、古文では、語彙であり、文法であり、また古典の背景となっている歴史的な事柄である。こうした知識の裏付けがあって初めて古文の問題に対応できるのである。ここに現代文との大きな差がある。現代文にも知識は必要だが、古文と比べれば、我々の習得期間は比較にならないほど長い。古文は、概ね高校に入ってから本格的に学ぶのであるから、しかも、その授業時間は限られているのであるから、接する時間には、大変な差が出てしまうのである。外国語である英語などよりもはるかに少ない時間しか与えられていない。したがって、読むこと自体にも慣れていない。そこに古文修得の難しさがあるのである。なおまた、出題者の側は、長年古文に接してきており、知識は十分備えている。無意識のうちに読解ができてしまう。知識の獲得に汲々としている受験生諸君とは、ここでも大きな差が出てくる。したがって、受験生の側から見れば、まず古文の文章に慣れ、それから知識の習得にかかり、その上で文章の深部に達するという手続きが必要になるのである。

文章をよく読むというのは、易しいようで案外難しい。古文の苦手な人は、大体において文章を読むこと自体が苦手だ。これは、現代文にも通じることである。国語が苦手な人は、読むことが好きではないことが多い。ろくに文章を読まずに、答えだけを求めようとする。その結果、ますますわからなくなってしまう。諸君にとって非常に絶望的な言い方をするなら、国語は、ある程度までは勉強で補えるが、それ以上の部分は、小さい時からの読書習慣や物の見方に左右される。多くの書物を読み、自分の頭で考え、文章を自分の手で書くという習慣を持ってきた人には、最後のところでどうしても対抗できないのである。ただ、古文の方にはまだ救いがある。それは知識である程度補えるという点である。知識というのは、勉強によって蓄えることができるものである。とは言え、その知識を獲得して、文章を理解するには、文章をよく読むことが大事であるということには変わりがない。文章を読むのが苦手な人は、

辛抱強く読む精神力を身につけなければならない。欠点を克服しようとする意欲に欠ける人に、成功は望み得ないのである。

文章をよく読むことがなぜたいせつなのか。言うまでもなく、繰り返し読むことで、大筋をつかむことができ、誤った先入観を捨てられるからである。しかし、それだけではない。知識を身につけるにも、よく読む、繰り返して読むというのは効果があるのである。語彙の面から言えば、語彙は単に暗記してもなかなか覚えられるものではない。文章の中で覚える方が、身につきやすいのである。これらが、直接的な効果であるが、それ以上に、よく読むことで、古文によけいな恐怖心を持たなくてすむという効果を生むのが大きい。まず、古文に慣れ、古文に親しんで、古文への苦手意識をなくさなければならない。

さて、次の段階が、文章の深部に達するということだが、これはなかなか難しい。先に述べた、身についたセンスが支配するところがあるからである。が、古文は現代文ほど、その比重は大きくない。想像力を働かせて、情況を把握することは、ある程度まで可能である。

そこで、この本では、まず文章に慣れ、それから基礎知識の習得にかかり、それをもとに応用を図るという方法をとるつもりである。古文には、時代やジャンルによってさまざまな対応の仕方があるので、それを応用編でこなしていくことにしたい。この本をじっくり読めば、確実に諸君の力は上がるはずである。諸君を国文学者に育てるための本ではない。あくまで入試に合格するための本である。が、「学問に王道なし」という言葉は、決して学問とは言い難い受験勉強にもあてはまる。諸君がこの本を利用するに当たっては、

一　例文は繰り返し読むこと

二　まず、自分の頭で理解しようと努めること。設問の解答は自ら作ること

三　言葉は文と一緒に覚えるつもりで、文章を頭に入れようと努めること

四　反復学習をすること

の四項目をよく守ってもらいたい。時間がさけるか心配する人もいるかもしれないが、時間など使いようでどうにでもなる。要は、やる気と集中力の問題である。勉強は、何事によらず、決して片手間にはできないものである。

第一編　入門

第一章　古文に慣れる

古文を好きになれない人の大部分は、古文を読むことに慣れていない。古文を何か特別のもののように思っている。しかし、諸君にとって、古文とはそんなに縁遠いものであろうか。

まず、次の歌を読んで、意味を考えてみよう。諸君のよく知っている歌であるから、一度は歌った経験があるはずだ。

仰げば尊し　わが師の恩
教への庭にも　はやいくとせ
思へばいと疾し　このとし月
今こそわかれめ　いざさらば

今はともかく、昔は必ず卒業式で歌われた歌だが、さて、小学生が正確に意味を知って歌っていただろうか。また、諸君も意味がわかっているだろうか。案外知らないのではあるまいか。あるいは、これを文法的に説明しようなどと思ったことがあるだろうか。そんなことを考えたこともあるまい。だが、現実には、文法問題とは無関係に歌われているのである。つまりは、無意識のうちに慣れてしまったわけである。因みに、この歌を文法的に考えてみよう。

「仰げば」の「仰げ」は、四段活用動詞「仰ぐ」の已然形、「ば」は接続助詞。この已然形の用法は、『万葉集』の

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る　（巻二、有間皇子）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com